

仏師快慶と法然

——中世職工人研究の新視点——

青 木 淳

一 はじめに

十六世紀、宗教改革の推進者マルティン・ルターは、その布教活動に際してドイツルネサンスを代表する画家ルカス・クラナーハ（一四七二—一五五三）をしばしば重用した。教会の権門体制化を批判し、見世物化した聖遺物崇拜を否定するなどルターの思想は急速に民衆社会へと浸透していく。両者がこの革新的な思想と信仰とによって強く結びれていたことは言うまでもない。クラナーハはルターの求めに応じ、有名なドイツ語版聖書の挿絵や教会の祭壇画、またさまざまなルターの肖像画を製作したが、多くの伝導者たちにとってこうした画家や彫刻家などの職能民たちとの親密な関係は、民衆との接点を創作する場面に極めて重要な意味をもっていた。わが国でも同様の関係は、特に中世の宗教者と職能民たちとの密接な関係をしばしば垣間見ることができるといえる。一例をあ

げると、治承四年（一一八〇）一二月に平家の焼討ちに遇った東大寺の復興造営では、重源という大勲進職を中心として、数多の勲進聖や仏師・絵仏師・番匠・鋳物師・石工などの職能集団により編成された巨大なネットワークが重要な役割を果たしている。中でも運慶とならび称される仏師の快慶はみずから、ミヅノ阿弥陀仏と称するなど重源の信仰に私淑し、東大寺はもとより重源が伊賀・播磨・高野山などに創設した別所に多くの仏像を製作したことが知られる。

二 快慶の後半生と初期浄土宗関係の造像

しかしながら建仁三年（一一〇三）の東大寺総供養を契機として東大寺の復興造営は終息へ向い、元仁元年（一一〇六）に重源が入寂するとこの職能民たちのネットワークも次第に解体していった。その後の快慶は、天台僧義空の開創した京都大報恩寺や天台座主慈円の要請による青蓮院熾盛光堂の造仏

などに参画するが、その背後にいかなる宗教的共同体や勧進組織が関係したかは定かでない。

ところが、滋賀・玉桂寺阿弥陀如来像など初期浄土宗関係の造像例が相次いで確認されるに及んでその作行きがいずれも安阿弥(快慶)様を示し、またいずれの作例も逆修あるいは物故者の追善供養を目的としたものであるなどの特色が見られる。すなわちこれら一連の共通点が見いだされる背景には初期浄土宗教団と仏師快慶とが教団による造像の必要性という意味において極めて密接な関係にあったものと考えられる。⁽¹⁾

そこで小稿では、以下の初期浄土宗関係の造像例の特色を紹介することを通じて、その背後にある教義的な事情、あるいは従来語られることになかった中世教団と職能民との関係について、いくつかの所論を提起してみたい。

三 造像の背景—法然の「像造起塔」論—

法然がその著『選択本願念仏集』に「若夫レ以造像起塔ヲ而為タマハバ本願ト者、貧窮困乏ノ類ハ定デ絶タン往生ノ望ヲ、然ルニ富貴ノ者ハ少ク貧賤ノ者ハ甚ダ多シ」と、古代的な慣習としての造像起塔などの作善信仰に対する批判を掲げたことは、結果的に多くの民衆を引き付けるひとつの契機となった。⁽²⁾

現存までに初期浄土宗教団による造像例として、奈良・興

善寺⁽³⁾、滋賀・玉桂寺⁽⁴⁾、阿弥陀寺⁽⁵⁾、京都・大念寺の阿弥陀如来像などが知られるが、いずれも来迎印を結ぶ三尺の立像で、その胎内には夥しい数の結縁交名が発見されるといふ共通点⁽⁶⁾は、いわば初期浄土宗教団が勧進を通じて造像結縁を信仰者たちにすすめていたことを意味する。そしてこれら一連の造像が快慶あるいはその弟子の長快により造像されていることの背景には重源を介して、法然浄土宗と快慶一門との密接な関係が推測されよう。

また建久年間に快慶により造立された京都・遣迎院阿弥陀如来像の結縁交名は、中世東大寺や高野山などの勧進組織によって募縁がなされたもので、藤原通憲・九条兼実・葉室行隆など法然と関係の深い一族一門の名が見えることから、法然を中心とする初期浄土宗教団の信仰者たちのネットワークと、重源ら勧進集団の外護者たちのネットワークとが同心円上にリンクしていたことを裏付けるところとなった。⁽⁷⁾

四 結語 —重源の役割り—

中世仏教の展開を考える場合、その成立基盤に東大寺復興造営の勧進職の果たした役割は少なくない。重源の天勸進職就任についても『法然上人行状絵図』では法然、また『紙衣膳』では柴西による委譲説を掲げている。いずれの説もその実態は定かでないが『三長記』(建永元年六月一九日条)には、法然

教団が興福寺衆徒より念仏停止を朝廷に告訴した事件（元久の法難）に際して朝廷はその判断に苦慮し、「先ず衆徒の奏状を以て、一旦勸進上人の重源に諮問し、その陳情を以てまた興福寺に問はるべし」という松殿基房の意見がみえる。⁽⁸⁾しかしながら重源はこれに先立つ六月五日に八六才の高齢で他界し、法然やその門弟の多くは刑に処されるところとなるが、この記事の背景には法然と重源との関係を読み取ることができる。

また、快慶のような仏師はともかく、多くの職能民とのネットワークを広げる大勸進重源にとって、武士や漁師・遊女など、その職能性が「悪」とみなされた人々の救済は重要な課題であった。仏教的な戒律観から発生したこの罪障観はこうした職能民たちの避けられざる「罪」の存在に対する手当ての必要性から生み出されたものであった。以上、小稿では法然などによる鎌倉新仏教教団の教義形成の底流にこうした職能民たちの救済というテーマが横たわっていることを指摘して今後の中世職工人研究の新たな視座の一端に位置付けて考えてみたい。

1 かつて三宅久雄氏は鎌倉時代の来迎形の阿弥陀像の受容をめぐりその背後に法然と快慶の関係を推測するが、「快慶と来迎阿弥陀三尊像」講談社刊『日本美術全集』第一〇巻、小稿ではさらに快慶作例にみられる像内納入品の分析を通じて両者にみら

仏師快慶と法然（青木）

れる勸進募縁の形態や外護者の相互関係などの共通点を取り上げ、法然と快慶の密接な関係をより積極的な立場から支持する。

2 『選択本願念仏集』第三。法然の造像起塔論について。拙稿「西山証空上人における造像の研究（1）—京都府乙訓郡・大念寺阿弥陀如来立像の造像をめぐる—」（『西山学会年報』第二号）。

3 約千五百名の結縁交名。法然・證空等の消息紙背に記されたもの。堀池春峰「興善寺藏法然上人等消息並びに念仏結縁交名状について」（『仏教史学』第十卷三号）参照。

4 約四万五千名の結縁交名。建暦二年（一一二二）法然の追善のため弟子の源智が発願したもの。伊藤唯真「浄土宗の成立と展開」（吉川弘文館刊）参照。

5 約四千二百名の結縁交名。快慶の弟子行快作。造像勸進には京都・大報恩寺や浄土宗諸行本願義の人々が関係した。拙稿「滋賀・阿弥陀寺阿弥陀如来像の結縁交名」（『印度学仏教学研究』第四三卷二号）参照。

6 約四百名の結縁札・結縁交名。法然の弟子証空ならびに後鳥羽上皇の息子道覚法親王による結縁造像。註2論文参照。

7 約一万二千名の結縁交名。拙稿「快慶作遣迎院阿弥陀如来像の結縁交名。—像内納入品資料に見る中世信仰者の「結果」とその構図—」（『仏教史研究』第三五卷二号）、同「重源と荣西—京都市・遣迎院阿弥陀如来立像への結縁をめぐる—」（『宗教研究』第六八卷第四号）、同「東大寺僧形八幡神像の結縁交名—造像を中心とした中世信仰者の結果とその構造—」（『密教図像』第一二号）参照。

8 田村円澄「重源と法然」（同氏『日本仏教史』3所収）参照。

本研究は平成七年度文部省科学研究費〈奨励研究〉による成果発表の一部である。

〈キーワード〉 快慶、法然、結縁交名、勸進、職能民と信仰（日本学術振興会特別研究員）